

学習支援教室に参加した貧困世帯の子どもの語りにみるその意義と課題

—高校生へのインタビュー調査から—

○関西国際大学 尾崎 慶太 (6437)

キーワード3つ：学習支援教室，高校生の語り，健全育成に資するプログラム

1. 研究目的

2000年代後半以降、子どもをめぐる貧困問題は社会的関心を集めている。その解決策の一つとして学習支援事業があり、厚生労働省は2009年「子どもの健全育成支援事業」、2011年「社会的な居場所づくり支援事業」、その後、2015年からは生活困窮者自立支援法における任意事業として位置づけた。学習支援事業の効果として、例えば高校進学率の改善が図られたという報告もあり、その期待するところは大きい。

他方、学習支援事業に対する期待感は、子どもの高校進学による経済的な世帯の自立を促すという従来の認識から、社会生活や日常生活の自立、健全育成、社会的な居場所という観点が付加され、教育政策としての意義にまで拡大されてきている（松村 2016）。

しかし、今のところ学習支援による子どもへの効果検証について十分な研究が蓄積されているとはいえない。その中でも、インタビュー調査を行い、参加することによる子どもの変化のプロセスを解明したり（三沢 2013）、自己肯定感の獲得プロセスのモデル化を試みたりする研究（成澤・添田 2011）がある。

そこで本報告では、学習支援教室に参加し、高校進学後も教室OBとして関わり続けている子どもにインタビュー調査を行い、彼らにとっての学習支援教室の意義を検討し、今後の課題について若干の考察を行うことを目的とする。

2. 研究の視点および方法

(1)調査対象者

本報告の調査対象者は、A市およびB市が実施する学習支援教室に2017年3月まで参加し、高校進学後も教室OBとして継続的に関わっている子ども（高校生）である。A市およびB市の学習支援教室は、それぞれNPO法人に業務委託を行っている。A市は地域を3地区に分けて教室を開催し、それぞれ週に2回、1回あたり3時間の運営を行っている。B市は地域を2地区に分けて教室を開催し、それぞれ週に1回、1回あたり2時間の運営を行っている。

(2)調査方法

調査は、約30分間のインタビューを行った。調査の趣旨を説明し同意を得た上で、ICレコーダーによる録音を行い、逐語録を作成した。調査時期は、2017年5月から6月である。

(3)分析方法

分析の手順として、子どもの語りのデータを、大谷（2007）の提唱する質的データ分析SCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いて分析を行った。

3. 倫理的配慮

上記調査に関して、報告者の所属機関「研究倫理委員会」による承認を得ている(受付番

号 H28-31 号)。また、本報告では、日本社会福祉学会研究倫理指針の指針内容を遵守している。

4. 研究結果

(1)子ども A の場合

子ども A の【参加の契機】は、保護者から「塾の代わりに行ったらどうか」というものだった。参加し始めてからは、「来たら勉強もできるし、友達もできるし、いい場所ではなかった。マイナスがなかった」と語っており、学習支援教室が【勉強のサポートを受ける】や【新たな友人関係を形成する】場所になっていることがわかる。さらに、大学生ボランティアや教室担当スタッフから学習面のサポートを受けたり、学習以外の話をしたりするなかで、「支援員と話をしている時」に「知らないことを教えてもらっている」ことが楽しいという【学習支援教室の魅力】を感じている。

他方、「現状に満足している。学習支援教室に対しては、特に要望がない」といった、新たに【学習支援教室に期待すること】はなく、子どもにとって慣れ親しんだ教室の維持を希望しているものであった。

(2)子ども B の場合

子ども B の【参加の契機】は、「高校受験が心配になって、勉強する場所があった方がよい」という助言を受けてのものだった。参加するようになり、「最初は人見知りだったんで、あまりしゃべらなかつたんですけど、日に日にしゃべるようになっていった」という【新たな友人関係を形成する】場になっているとともに、「みんなでしゃべりながら（勉強が）できる」と【学習支援教室の魅力】を語っている。また、子ども A 同様に、【学習支援教室に期待すること】は語られなかったが、【継続的な参加の理由】は、「勉強は嫌いやと言っても、何もせずずっと過ごすより、ちゃんと勉強して自分の将来につなげられればなと思って」と語るように、学習を継続していく必要性とともに、そのために学習支援教室の存在が不可欠であると感じていると推察できる。

5. 考察

本報告では、高校進学後も教室 OB として関わり続けている子どもにインタビュー調査を行い、学習支援教室の意義について検討を行った。子どもにとって、学習支援教室は勉強する場所であるとともに、新たな友人関係を形成する場所である。それは、高校進学後も継続して参加する動機につながっていることが推察される。他方、学習支援教室で行われるプログラムに対しては、具体的な要望を出さない子どももいる。参加する子どもにとって、居心地の良い状況を表している一方、今後は、学習支援教室に期待される教育的側面、とりわけ健全育成に資するプログラムの検討が望まれる。

【参考文献】

- 松村智史(2016)「貧困世帯の子どもの学習支援事業の成り立ちと福祉・教育政策上の位置づけの変化-行政審議、国会審理および新聞報道から-」『社会福祉学』57(2), 43-56.
三沢徳枝(2013)「生活保護世帯の生徒への学習支援-生徒の語りによる M-GTA 分析-」『弘前大学教育学部附属教育実践総合センター研究員紀要』第 11 号, 59-67.
成澤弘明・添田祥史(2011)「自己肯定感の獲得プロセスに関する一考察：冬月荘『Z っと！Scrum』を事例に」『北海道教育大学紀要』61(2), 49-60.